

東京多摩地区現代俳句協会

多摩のあけぼの

会報 No.156



高校生と俳句

櫻 さとみ

タイトルは2013年3月の私の修士論文の題目である。いや、正確に言うならば、修士論文題目に困っていた私に、指導主査であった教授坪内稔典氏が「『高校生と俳句』にしない」と命じて書くこととなった論文題目である。拙稿ながら論文要旨をここに少し紹介する。

一 論文要旨

俳句は言語活動の総合芸術であり、児童生徒の「豊かな心」を育むために欠くことのできない教科書教材と言える。本稿は高校生の教科書において、俳句教材がどのように取り上げられ教えられているかを学習指導要領の変遷に沿って整理すると

もに、望ましい俳句の授業について考察したものである。

学習指導要領はこれまで7回に亘って改訂されてきた。6回目の改訂（H20・21）で必修科目「国語総合」が創設され、ここで初めて近世俳句と近代俳句とが同一教科書中に並ぶことになった。しかし内容は依然「名句鑑賞」が中心であり、生徒の豊かな心の育成のためにも、句会の楽しみを上げるべきである。

二 教科書採録俳句のランキング（H25年度用「国語総合」全出版社分）

調査は主に江東区の「教科書図書館」にて論文執筆時に必履修科目であった「国語総合」の教科書（全出版社分）について実施した。

1位の「万緑の中や…」は17冊に掲載されており、多くの教科書会社が名句と認める句、と見ることもできる。紙面の都合上途中までの掲載となるが、全体をご覧になりたい方はQRで

多摩風土記（五ノ神まいまいず井戸）

以前、本協会俳句研究会の会場ともなった羽村市五ノ神会館に隣接して、都指定史跡のまいまいず井戸がある。技術未発達のため、水が得られる深さまですり鉢状に掘り、螺旋状の通路がめぐっているの、蝸牛を意味する「まいまい」とよばれた。多摩の各地に造られ、町田市の「めいめい谷戸」という地名は、「まいまいず井戸」があったからという。（小山健介）

ご確認頂きたい（QRコードを携帯カメラで読み取って頂ければ表にジャンプします）。

【教科書採録俳句のランキング】（カッコ内は採録教科書数）

1位（17）	万緑の中や吾子の菌生え初むる	中村草田男
2位（12）	うしろすがたのしぐれてゆくか	種田山頭火
3位（11）	鯛雲人に告ぐべきことならず	加藤 楸邨
4位（10）	いくたびも雪の深さを尋ねけり	正岡 子規
4位（10）	芋の露連山影を正しうす	飯田 蛇笏
4位（10）	海に出て木枯らし帰るところなし	山口 誓子
4位（10）	白牡丹といふといへども紅ほのか	高浜 虚子
8位（9）	分け入っても分け入っても青い山	種田山頭火
9位（7）	炎天の遠き帆やわがこころの帆	山口 誓子
9位（7）	遠山に日の当たりたる枯野かな	高浜 虚子
9位（7）	玫瑰や今も沖には未来あり	中村草田男
12位（6）	啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々	水原秋桜子
12位（6）	つきぬけて天上の紺曼珠沙華	山口 誓子
12位（6）	手毬唄かなしきことをうつくしく	高浜 虚子
12位（6）	鶏頭の十四五本もありぬべし	正岡 子規

三 求められる俳句の授業について

2009年愛媛大学にて開催された「短詩型の創作指導の意義と方法」パネルディスカッションでは次の6点が指摘された。

① 結社とは異なり、主宰者不在の教室の場の特殊性をどう捉えるか。

② 創作の動機付けをいかに行うか。

③ 文芸の創作と教員の資質の問題。

④ 学習指導としての評価をいかに行うか。

⑤ 作品をどう楽しむか、という座の文芸を教室に持ち込むことができるか。

⑥ 創作によって何が育つか。

パネリストであった坪内稔典氏は小中学校で句会形式の授業を多く実践されているが、上記6点の解決となりうる次のような持論を提案している。すなわち従来の「感動を表現する」という創作の方法を転換し、「表現して感動する」という言葉による感動の発見を唱えているのである。

氏は言葉を音楽における音符、絵画における絵の具の様に捉え、言葉がその組み合わせによって世界を構築していくのだと捉えている。こうした手法で句会を開催すれば、他者の解釈によって自己を再発見することとなり、言葉の世界は無限に広がっていくと考えられるからである。

だから、授業において創作の動機付けを持ち出したり、何のために俳句を作るか、など考えずに、「クラスで作ってみんなで楽しもう」と呼びかければ良いのである。ただその場合でも④の評価の問題は残る。秀逸とされる句を作った者の評価が高くなるのが一般的であろうが、座の文芸「表現して感動する」

という観点からすれば、よく楽しめた者の評価を高くするのも手ではないかと考える。

それはひいては国語科全体の目標（国語を適切に表現し、確に理解する能力を育成し（以下略））に近づくことにもなり、生徒の心を豊かにすることに繋がると思われるからである。「表現して感動する」句会の形式こそ、国語力の育成にダイレクトに繋がる。俳句鑑賞や作句に終わらず、句会の楽しみをこそ、生徒に伝えて行くべきである。

四 実践と感想

久しぶりに自分の書いたものを読み返し、かなり乱暴に縮めてみたが、10年以上経つ今も状況はそう変わってはいないと感じている。当時から現在に至るまで私は「名句鑑賞」の時間を作句の時間にし、余裕があれば句会もどきを実践してきた。

俳句は初めてという生徒に、いきなり作句は当然無理で、だいたい次のような順序で慣らしていく。①俳号を付けよう（カタンでもタレント名のもじりでも何でもOK、俳句の授業では俳号で呼び合うよ！と言うと教室中が俄然盛り上がる）②五七五日記を書こう（季語はなくてもよいから、とにかくリズムに慣れること）③真似俳句を作ろう（ある俳句の上五又は下五だけ替えてみよう）④季語を知ろう（歳時記を見せ、好きな季語を選ばせたり、季語当てクイズをする。驚くほど季節感がない生徒が多い）⑤兼題・当季雑詠で作ってみよう（つ

ぶやき＋季語で取り合わせの句ができることを教えたり…）

校内のICT化、携帯電話の影響で体験不足の子ども達が増え、伝統的なものを伝えることが困難になってきている。自分で作った俳句を教員のところに持ってきて「声出してよまないでください！」と言う生徒も珍しくない。感動を表現する従来の創作教育の悪弊か、日常の中に「感動」を探す苦痛、自己の感動や感情をオープンにする気恥ずかしさ、また評価される居心地の悪さが人との関わりを上手く持てない最近の生徒事情と交錯する。「評価？一生懸命考えて、たくさん俳句を作ってくれた人はみんなA、中身が上手いかどうかはその次ね」というと『本当？』と驚きの表情を見せ、やっとなとして作り出す。「楽しいから俳句を作ろう！」そう呼びかけて今年も全学年に俳句の授業を取り入れている。



ランキング表全体は上のQRコードから見られます。

注 採録数は同出版社でも、異なる教科書（新訂など）の場合
はそれぞれ1としてカウントした。

注 採録数が1の句は出版社名を備考に付した。
注 同順位中の俳句は順不同。

あけぼの集

夏草や少し弱気に生きた僕さいたま 青木 鶴城
 黒焦げの十字架掲ぐ広島忌 八王子 青木 隆
 仕事と家庭以外も団栗とかあるよ 八王子 赤野 四羽
 気流とび近江の秋をほしいまま 国分寺 彰 穂
 母許へつづくこの道 白木 権 国分寺 秋山ふみ子
 プーチンの貌向日葵の背後から 多 摩 足立喜美子
 裏拍で加はる夕焼のセッション 小 平 安達 昌代
 芙蓉咲く酔はぬとは云へ紅をさし 清 瀬 穴原 達治
 平常と非常のあわい蜘蛛の糸 稲 城 新井 温子
 秋の蚊に待たれてゐたるベンチかな 八王子 荒川勢津子
 あの月が五つならべば恐ろしい 町 田 有坂 花野
 「銀漢の彼方に居る」と考妣より 狛 江 有原 雅香
 差す手より引く手かなしや風の盆 国分寺 安西 篤
 苛立がすり足で来る土用 東風 足 立 飯田 和子
 薬持つ米寿と喜寿や秋の旅 東久留米 飯田 玉記
 炎帝に茶毘に付される地球ごと 多 摩 石川 春兎
 萩の穂や白狼伝説真しやかに 小 平 石橋いろり

老舗閉ず跡継ぎ無しや夏の朝 練 馬 石原 俊彦
 この道を行けば古里立 葵 青 梅 一ノ瀬 順子
 藻の花やどこかには効く痛み止 日 野 一関なつみ
 秋櫻高齢者はコスモスと読む 狛 江 伊東 類
 秋立ちぬ位置を正しく皿二枚 町 田 稲吉 豊
 父の忌や内なる曠野カシオペア 京 都 岩佐ひすい
 富士を背に多摩の横山 晚夏 光 武蔵 野 内田 牧人
 広島に買ひし帽子で炎天へ 武蔵 野 江中 真弓
 戦争は人類の敵 揚げ花 火 府 中 大井 恒行
 子の頭に忘れたままの夏帽子 府 中 大石 雄鬼
 「おはよう」と今朝も隣家の朝顔に 日 野 大槻 正茂
 秋蝶の風の隙間を縫い終える 川 崎 大西 恵
 メガソーラー別れ鳥の発ちし後 三 鷹 大森 敦夫
 認知症月間(九月)といえは 季 語 昭 島 岡崎たかね
 ほうたるの人惹きつけて知らぬ 顔 三 鷹 小川 紅子
 中元カタログ聘珍樓の恙なし 三 鷹 小川 葉子
 野仏に鳩戯れて神の留守 川 崎 尾崎 太郎

あけぼの集

大乗りす爺婆孫と午睡かな昭 島尾関 英正
 ひとり住む卒寿の母や鰯雲青 梅小野こうふう
 花水木のと鉄道の白き波立 川花 朶
 手火花やこんな遠くに來てをりぬ立 川片倉みちこ
 この星の行方や秋暑劫火ならむ昭 島亀津ひのとり
 流星を追う夫よそこに高軒西東京河 順子
 八月は焼けたドームが顔に見え立 川川島 一夫
 孫娘に婚約指輪菊日和清 瀬神崎 幸子
 煮凝りや合点のゆかぬ事ばかり小 平城内 明子
 古寺の日向で半分蒸かし芋大 田小泉満知子
 音読で繙く漢詩涼しかり三 鷹高坂 栄子
 もらわれてすぐまわりだすメダカの子西東京 幸村 睦子
 稲つるび体温のあるヴァイオリン小 平後藤 行雄
 ひとつずつ手離す練習火花咲く府 中小林 育子
 向日葵の終りの色は懺悔なりあきる野 小林マリ子
 七夕や銀河に近き無人駅町 田小山 健介
 被爆樹の悶へし樹形原爆忌立 川齋木 和俊

運転免許返上終わり柿囓る多 摩齊田 仁
 逆立てる猫の毛に似る夕立かな昭 島坂本 空
 追いかけて祭り阿呆となりにけり小金井櫻 さとみ
 水中花女の一生しかじかと東久留米 佐々木克子
 かなかな声に開かずの裏鬼門府 中笹木 弘
 しんこ細工のペガサス翔てる子どもの日府 中佐藤 栄子
 ごはん粒で封じた記憶遠花火調 布佐藤 茉
 涙袋隠れますかとサン格拉斯昭 島佐藤 光子
 空蟬のまだあきらめていない顔杉 並島 彩可
 蛭狩ミサイル飛び交う裏側で足 利清水 弘一
 紙飛行機のまだ知らぬ空白き風世田谷 鈴木 浮葉
 夏座敷曾孫這い這い蹴る力立 川鈴木かずえ
 立秋の一雨欲しき畑かな小 平鈴木 寿江
 秋海棠精霊踊る真昼中小金井 鈴木 佑子
 公園を横切りてゆく黒日傘板 橋諏訪部典子
 さるすべり気温体温四十度小 平関 梓
 星祭まつり縫いして子の走り小 平高瀬多佳子

あけぼの集

無気味なる海鞘^{はや}を好きとは言ひがたく 西東京 高原 桐
 深々と昭和天皇陵茂り清瀬谷村 鯛夢
 先ず一度拒否してみたい茄子の花 国分寺 玉井 豊
 暑き中芭蕉稲荷に祈願する 稲城 玉木 康博
 ぎくしやくと言ひわけへくそかずらかな日 野 玉木 祐
 生ビールまた勝つてゐるタイガース立 川 田村 明通
 蟬時雨多摩川流る太古より三鷹 田山 光起
 傘畳むやうに八月終りけり 武蔵野 津久井 紀代
 虹の先乱れて今日は亡母恋うる 八王子 辻 升人
 息潜め蛍の後をついて行き 八王子 辻 丕子
 思うより水引の花頑丈よ 清瀬 寺島 美美子
 甚平着て時計はずしてもう十年 西東京 戸川 晟
 万緑や吸い込まれゆく地域バス杉並 飛永 百合子
 ペケ四つ抱えて大は爽やかに 清瀬 永井 潮
 草原にとんぼとんぼや平和なり立川 中條 啓子
 私には見えない私 天の川 西東京 中田とも子
 阿夫利嶺を吹きよせて巻く秋すだれ 座間 長野 保代

草田男の葡萄の一句秋北斗 武蔵野 夏目 重美
 行く秋や日毎つのりし未知の老い町 田成戸 寿彦
 深海の遺骨に添うや水母水母 国分寺 南行ひかる
 見返り阿弥陀のぼる石燈後の月 西東京 西川 五月
 母の日の母の算盤五つ玉 世田谷 西前 千恵
 中野にいまだ軍のなごりや蛇苺 昭島 西村 智治
 百万本のひまわり 後ろの正面誰だ 三鷹 拔山 裕子
 淡々と時を太らせ滴れり 八王子 沼田 博古
 菊人形無言のなかに力見せ 三鷹 根岸 敏三
 羽抜鶏体力はなく気力のみ 三鷹 根岸 操
 あと何回生きて黙禱原爆忌 小平 野口 佐稔
 猫じやらし揺らして父の魂還る 羽村 野島 正則
 龍の玉来世も妻と言われたき 青梅 萩原 芙沙
 秋の潮引き取りに來た水母の死 武蔵野 蓮見 徳郎
 大股で戻つて來し児と捕虫網 小金井 平井 葵
 星月夜ぼくら生命樹の途中 八王子 広井 和之
 美美子忌や百味筆筒を置く蕎麦屋 調布 藤原はる美

あけぼの集

殿方の手招きにつひ踊りの輪練 馬淵田 芥門
 戦あるな 延えんと蟻の列 八王子 冬木 喬
 百日紅また擱まれる言葉尻 国 立前田 弘
 百日紅小さな覚悟決めにけり 国 立前田 光枝
 曼珠沙華夜が炎を消しにくる 八王子 松元 峯子
 水を下さいカマキリの子らの死よ 東久留米 三池 泉
 ためいきに満ちた都会の熱帯夜 東久留米 三池しみず
 百日紅花散り際に兄他界 東久留米 三浦 禎三
 浜波の寄せては返す籠枕 小金井 三浦 長閑
 おぼろ夜の土の膨るる匂いして 世田谷 三浦 文子
 凌霄花わが睡眠は中二階町 田 三木 冬子
 旅に発つ牛の眼に草の花 東大和 水落 清子
 ごんぎつね今夜も来るか 芒原 三 鷹 水野 星闇
 茂るだけ茂り断層崖屹立 日 野 満田 光生
 こんなにも暇な時間のある猛暑 昭 島 宮腰 秀子
 余生という廊下に立ち止まる良夜 調 布 宮崎 斗士
 鬼灯を金髪に挿す浅草寺 国分寺 武藤 幹

古歌の詠む秋の恋しい耐える日々 小金井 村井 一枝
 花梯梧ラヂオの音が途切れたる 岐 阜 村山 恭子
 太陽系脱け出て須弥山秋の風 熱 海 望月 哲土
 椋の群れ迎える前の空の色 東村山 森本由美子
 夜を聴く蜘蛛のかたちとなりけり 三 鷹 守谷 茂泰
 炎天下Tシャツに「猫と話せます」 三 鷹 柳生 正名
 秋空や嬰の瞳のなお深し 府 中 山本 徳子
 秋思あり沈む夕日が遠山に 調 布 豊 宣光
 八月の飛行機雲がまだ消えず 稲 城 好井 由江
 水平線心の色を探す 夏 三 鷹 吉川 真実
 新月の沖から空母来る日本 東久留米 吉平たもつ
 秋の空好きに歩いて好きな径 国 立 吉村春風子
 夕風や八十年の波高し 町 田 米倉 信山
 食べて寝て木の実ころがす うちの猫 立 川 米澤 久子
 夕されば唱へる呪文からす 瓜 小 平 我妻 民雄
 日曜の青信前へ木の実落つ 青 梅 渡部 洋一

※155号掲載の森本由美子様の句は、作者違いのため取り消します。

青木 隆

柵窓開けて子に見す春の雲

藤原はる美

いかなる状況かは詳らかではないが、子に先立たれた親の心情はいかばかりであろうか。深い悲しみの中、人生を全うできなかったであろう愛する子との最後の別れにせめて春の雲を見せようとする親心が切々と胸を打つ。

秋山ふみ子

みんなの声が本降り大樺

渡部 洋一

近所の公園に幾本かの樺があり、四季折々様々な姿を見せてくれます。猛暑のこの頃も大きな樺から一斉に聞こえる蝉声に圧倒されます。殊に「みんな」の声は力強く、生命力を感じます。その様を「本降り」と表現された措辞に感銘しました。

安西 篤

無為の日のつみかさなりて花の屑

小林 育子

コロナ禍以来、心ならずも無為の日々を重ねてきたが、時を経るにつれいつよりか馴らされていたようだ。花の屑は、そんな日々の堆積とみていい。同時に、失われた時の取り返しのつかなさ、それ故の寄る辺なさをも花屑から感じさせられている。

石橋いろり

薔あられ李朝の盆に少しかな

西村 智治

李朝の盆とは、李氏朝鮮王朝で作られた漆塗りの八角盆や丸盆の事だろう。朱塗の盆に薔あられを少し盛る。健やかな子の幸せを祈って。三十五年に及ぶ朝鮮統治という朝鮮への蛮行が作者に過る。だが敢て欲張らず少し盛って、平和を希求するのだ。

稲吉 豊

白日傘くるり八十路の下り坂

三浦 長閑

存えて八十路の下り坂に至った作者。もう上る坂はない、と見極めている。やや寂しさはあるが重力に任せて下る楽な道行だ。どれだけの時間が残されているかは神のみの知る所。上八の所作に人生の達観が窺える。

大石 雄鬼

もぎ立てトマト背面跳びの味がした

宮崎 斗士

私は背面跳びをしたこともないし、その味ももちろん知らない。太陽をからだいっぱい浴びて育ったトマト。背面跳びも跳んでいるとき、太陽が眼に入り、体のおもて面全体に陽を感じるだろう。挽ぎるのは背面跳びの踏み切る瞬間でもある。

大石 ゆめ

ここだけの話海月が寄ってくる

有坂 花野

ここだけの話よ。たちまち陽光が陰り、どんよりと冷たい水中の気配。あちらこちらから身を乗り出して、何気なく耳をそばだてる影がゆらゆらと、海月のように。

小川 紅子

愛されてわがままになる赤い薔薇

三池しみず

真っ赤な薔薇は誰もがハッとさせられる美しさで、愛でない者はいないでしょうという感じを素晴らしく表現されていると感動しました。

門野ミキ子

かぎ括弧だけですごして長閑なり

玉井 豊

会話のことをかぎ括弧とはおもしろい。季語が長閑だから、賑やかに会話が行きかう大家族の団欒ではない。例えば熟年夫婦の「あれ」「それ」で事足りる日常を想像する。穏やかにくつろいだゆつくりした時間が見えてくる。

亀津ひのとり

薔薇剪つて余命五年とは忙しい

吉平たもつ

美しい薔薇の花を剪る作業をしつつ、ふと医者の一言、余命五年。が、作者はそれを如何にも淡々と受け止める。沢山の薔薇を育てる仕事か？或いは他にもやりたい事があるのか、五年でやれとは何と忙しい事だ、万感の眩き。この俳諧精神見習うべし。

小林 育子

麦の秋両目つむれば見えるもの

芹沢 愛子

黄金色に色づいた一面の麦はそれだけで美しい。目をつむること、麦畑は果てしなく広がり、光や風の音も強く感じられる。同時に、心の奥底に静かにある自分に問いかけ、ふだんは気づかない何かが見えたのかもかもしれない。

小山 健介

夏めくや大きな声でグアテマラ

亀津ひのとり

吉祥寺の井の頭公園の近くにあったモカという喫茶店を思い出した。お気に入りの席で「本日の珈琲」の「グアテマラ」を注文する作者。大きな窓から入る初夏を思わせる日差し。店内の設え。抑制された表現が読者の想像を拡げてくれる。

齋木 和俊

子らなりの折り合いつける夕焼け雲

石橋いろり

子供たちの日常の中にも、悩みや葛藤はあることでしょう。しかし、子供らはそれに折り合いをつけながら日々成長していきます。作者はその姿を夕焼け雲のように優しく慈しみながら見守っています。その心の広さと子供らへの深い愛情を感じます。

斉田 仁

ただ歩く緑の風を浴びながら

山崎せつ子

肩の力を抜いて、率直に事実のみを書きながら、読者に明るさと希望を醸し出す。平明だが、よく読みこんでいくと、句の奥にある境涯感のようなものが見えてくる。齢を重ねる毎に感じる日常と自然との共感、技巧も思惑もなく、素のままの人間…。

櫻 さとみ

汽笛一声春愁の真ん中を

小林マリ子

少しばんやりした薄曇りで、野花が咲く春の日に物思いに耽っていると、おぼろげな空気を汽笛の音が裂いていく。そんな情景が想起されます。堂々として体に染み渡る汽笛の音と、どこか捉えどころのない暖味な春の対比が美しいです。

島田 澄子

乳飲み子の形に汗のあるシート

一関なつみ

この句を拝見した時、昼寝から覚め汗びつしりで抱き上げた時、赤子の形に汗とミルクのもやつとした香りがしました。今は大きくなり顔を見るのも少なくなりましたが、思い出して懐かしくほのぼのとした気持ちになりました。大切にしたいです。

田山 光起

愛されてわがままになる赤い薔薇

三池しみず

世の中思惑どおりにはならない。松元作「ぐくだみ」の句のように元氣すぎれば嫌われるし、この句のように愛されすぎても「わがまま」になる。ほめられたり貶されたりして生きるのがいちばんなのかも。老老介護のこの頃、やさしい言葉が嬉しい。

津久井紀代

子らなりの折り合いつける夕焼け雲

石橋いろり

何に折り合いをつけたかは知る必要はない。夕焼け雲がそのすべてを語っているからだ。夏の夕焼け雲には心奪われる。「子らなりの」であるから、これは大人の喧嘩とは違う。一日にけじめをつけて家路に急ぐと取るのが妥当であろうか。童話性が魅力。

辻 升人

梅もぎの脚立に夕日暮れ残る

田山 光起

さて今日は何をやるう、そうだ、梅は充分に実り早く収穫してくれと言わんばかりに身をもてあましている。その梅を一日がかりで収穫し終えたのだろう。ふと見ると脚立に夕日の赤、達成感の映像がまざまざと見えてくる。小さな幸せを私にも：

寺島芙美子

花水木持ち歩いてる糸電話

前田 光枝

桜の花が咲き終る頃近所の大通りに花水木が一斉に咲き、バスに乗っていると顔に当るかと思う程。夏は葉が繁り、秋に赤い実がつく。糸電話はきつと胸の中に入り、瞬時に伝えたい人と話が出来る。私なら母であつたりして。大変心に響きました。

戸川 晟

看る人から看られる人へ茄子の花

関 梓

若干作者の心情を傷つける表現になるかもしれないが、お許しを頂いて。老々介護でパートナーを看取り、ほっとする暇もなく自分が看取られる身になったという嘆き。長寿日本の典型的な一コマである。先が良いか後が良いかそれが我が家の課題。

飛永百合子

花水木風のかたちの母と居る

前田 弘

花水木の側に佇む母を感じたのである。勿論姿が見えるはずはない。しかししつかりと母を感じる。母は風のかたちとなって作者の前に現れたのである。作者だけに分かる母の姿。母は永遠である。

永井 潮

愛されてわがままになる赤い薔薇

三池しみず

花言葉を感じる一行書きの断定だが、人の生き方をも暗示させる。今まで人生の節目節目に幾度となく花束を受け取ってきたのだろう。その度に状況に甘えつつ自らの思いのままに選択し暮らしてきた。今ある満足に少し反省を滲ませた愛すべき一句。

西前 千恵

一つ覚え二つ忘れてペンペン草

城内 明子

まるで自分の事を云われているような気が致します。でも何とか生きてゆかねばとどこにもある雑草のように、たくましく明るくがんばろうと自分にいいかせています。実感の楽しい御句ですね。

(154号より)

沼田 博古

囀りにかかわりたくなき一日かな

平井 葵

囀りとは繁殖期の小鳥の雄の美しい鳴き方だが、時には鬱陶しく感じる。作者はまさしく関わりたくない心持ちだったのだ。それが一日続いた。囀りをこのように表現した句は珍しく、作者は好奇心旺盛、忙しい方なのだろう。楽しい一句だった。

野島 正則

深海の父よ桜は見えますか

拔山 裕子

深海の父。私の父は、8月22日に永眠した。この句の作者も、お父様を亡くし、深海はその事の比喩に感じた。地上の桜を見て楽しんでもらいたい、願望であろう。

広井 和之

もぎ立てトマト背面跳びの味がした

宮崎 斗士

「背面跳びの味」の衝撃。「もぎ立てトマト」は、走り高跳び選手がバーすれすれに浮遊するのとイメージが重なる。どんな味だろう。通常の流通ルートから離れた「背教」「異端」、すなわち「背面」に通ずる味。新しい表現の創造に注目した。

淵田 芥門
 蝉丸の弾きし琵琶や臚月

青木 隆

あの逢坂の関の蝉丸の琵琶を吉水神社に
 覧じての句。臚月との取合せは蝉丸の故事
 を知れば猶更の妙。王維の漢詩「竹里館」
 （独り竹林で琴を奏でれば月は朗々と照ら
 す）の、落莫たる幽林の景や、蕪村の「行
 春や重たき琵琶の抱きこころ」を想う。

松元 峯子

宮崎 斗士

もぎ立てトマト背面跳びの味がした。

もぎ立てトマトを食べた時「背面跳の味
 がした」という作者の感動に、私も共感し
 た。陸上部だった私に、走高跳で背面跳の
 上手な友がいた。跳んだ後、彼女はスカッ
 とした満足気な表情をしていた。トマトの
 味は、そんなスカッとした美味だったのだ。

三池 泉

松元 峯子

どくだみや元氣良過ぎて嫌われる

ご近所のどくだみが元気で、折角の前庭
 を陣取っている。どんどん増える一方で抜
 くのも大変。十葉が終れば抜くと云ってい
 たのに。でも煎じ薬になるとか。今時実行
 する人が居るだろうか。雑草はとにかく強
 過ぎる。人間も嫌われるかもしれない。

三浦 文子

赤野 四羽

目ん玉の水をとおって万緑来

「目ん玉の水をとおって」という上五中
 七に心を掴まれた。目はよくカメラに例え
 られるが、万緑の圧倒的な情景が、角膜、
 水晶体等を通して作者に染み通っていく様
 が強く窺えた。「目ん玉」という言葉の幹
 旋も魅力的である。

水野 星闇

大井 恒行

水葬のもたらす花よ暮れる海

戦艦大和が沖繩特攻に向かう途次、米軍
 の執拗な攻撃を受けて沈没した日は昭和
 二十年四月七日、三千名近くの英霊と共に
 今も海中に在る。深い鎮魂の思いは、国民
 の脳裡に変わることなく、受け継がれてい
 る。

満田 光生

遠山 陽子

夏野原三步歩いて老いにけり

たつた三步で老いるはずはない。草いき
 れの立つ夏野に足を踏み入れるや否や、自
 らの老いを実感したのだ。生命のエネルギ
 そのものの夏草が鬱陶しい。「三步歩いて
 老い」のユーモラスな措辞により、老いの
 愚痴ならぬさっぱりした句になっている。

宮崎 斗士

中田とも子

八十路てふ木なら大木万緑裡

生命感あふれる夏の森に佇むひととき。
 ふと一本の木が目に残る。私がかもし木に
 生まれていたら、おそらく今頃はこれぐら
 いの大きな木に……。木に凭れつつ、来
 し方をしみじみと振り返る作者だろうか。
 これもまた麗しき万緑との交歓。

村山 恭子

水野 星闇

新緑やいつかやさしくなれる刻

新緑の明といつかやさしくの暗の対比が
 魅力。今はやさしくないが、いつかはやさ
 しくなれるという願いや祈りに、新緑が明
 るい未来や展開を呈示しています。また時
 ではなく刻の字を用い、その時間を刻み込
 むと印象付けています。

森本由美子

石橋いろり

子らなりの折り合いつける夕焼け雲

一体何事が、と想像をはじめた途端、
 ピュアでイノセントな子供達の世界に接触
 してしまい、私の心臓はキュンと音を立て
 ていた。決着がついた時、いささかな自負
 心に引き締まって見える子等の健気な顔。
 家路へ。下五がとびきりである。

吉平たもつ

沸騰する地球の端に金魚飼う

城内 明子

今年の夏は、地球全体が暑くなった。原因は地球の温暖化が指摘されている。人類が起因の温暖化は、熱波・干ばつ・大雨・台風などの異常気象が増加している。家庭では、エアコンで適温になつていて過ごし易いが、金魚にとつての水温は適温だろうか。

我妻 民雄

五体不満足にて花吹雪浴ぶ

佐々木克子

「五体不満足」と「花吹雪浴ぶ」のフリーズが、二音の助詞により対句のように向いあう。五七五のリズムは無視された十七音。その二つの句跨りは、老の悲しみと天国的陶酔とを可視化してあざやかである。

(155号追加分)

森本由美子

花種を蒔いて何やら使命感

平山 道子

蒔く前は袋の写真を眺めこんなに見事に咲くものかと半信半疑。でも蒔き終えたあと疑念は薄れ、花に対する期待と愛情はすでに心に芽生えている。自然への使命感は日々の生活に活力を与えてくれる。水やりが楽しみ。

(154号より)

第6回 俳句研究会

6月28日(土) 立川市子ども未来センター

担当幹事 石橋いろり・秋山ふみ子

玉木康博・根岸操

亀津ひのとり・青木隆

大森敦夫

参加者25名

兼題「紫陽花」または雑詠

★講話なし

うれしくて曲がってしまう胡瓜かな 水落 清子
 枇杷熟るの団地に空家目立つ時 亀津ひのとり
 出戻りのくるくる回す白日傘 三浦 長閑
 沖縄忌焼けた鼻緒の下駄ひとつ 齋木 和俊
 紫陽花は悪夢の出口かもしれず 大石 雄鬼
 白あぢさゐ経帷子に一枝置く 淵田 芥門
 地球にも俺にも余命黒揚羽 小山 健介
 パソコンと話す医者冷奴 飯田 玉記
 紫陽花や二藍光る 遼 石橋いろり
 七変化好まぬままに八十路過ぎ 森本由美子
 夕間暮現れ溶ける黒揚羽 石原 俊彦
 白南風や青き畳に寝転びて 尾崎 太郎
 掌のせていとしきものにさくらんぼ 佐々木克子
 白玉や女の会話とぎれなく 秋山ふみ子
 時の日の未だ目覚めぬ寝釈迦かな 松井 彰子
 ころもと鍋いっぱいの実梅かな 根岸 操
 他所ん家の勝手口から覗く夏 大森 敦夫

永井潮さん「風を詠む」年間賞大賞

現代俳句協会は『現代俳句』誌上の投稿欄「風を詠む」に年間賞を制定し、このほど第一回「風を詠む」年間賞を発表しました。三人の選者によりそれぞれ「年間賞大賞」一人、「年間賞」五人が選ばれました。当地区から永井潮さんの作品が中村和弘選の年間賞大賞を受賞しました。

中村和弘選「年間賞大賞」

虎落笛地を生き抜きし瞽女の唄 永井 潮

永井江美子選「年間賞大賞」

からだふと木枯し一号ふとたてがみ 山中葛子

柳生正名選「年間賞大賞」

寒卵立つための思想がない 与語孝子

あけぼの便り

○残暑お見舞い申し上げます。毎々お世話様になります。
(荒川勢津子)

○よろしくお願いいたします。
(花 朶)

○猛暑をなんとか生き抜くため無理せず自然体で生きております。
(佐々木克子)

○お暑うございます。編集の皆様、お世話があります。
(佐藤 茉)

○残暑お見舞い申し上げます。お世話になっております。
(佐藤 光子)

○伊藤類様、小野こうふう様、城内明子様、一句鑑賞にとり上げて頂きありがとうございます。
(島 彩可)

○漢詩を始めて五年、こちらも粗製濫造です。
(清水 弘二)

○有原雅香様 鈴木佑子様 会報155号に拙句をお採り上げ下さり有難うございました。
(城内 明子)

○会報155号に白いレースのような外来種らしき花を見つけたことを記しました。その後「オルレア(又はオルラヤ)」と名前がわかりました。
(高原 桐)

○暑いと言ってもどうにもならぬ日々が続きますが、空地にトンボが群れているの

を見て元気が出ました。
(寺島芙美子)

○外出が怖くなる猛暑続き。外出と言っても病院通いだけです。
(飛水百合子)

○谷村鯛夢様、拙句を取り上げて頂きありがとうございます。
(咲き満ち)

○てこぼる、花もなかりけり 虚子」になり寄りかかっていますね。
(永井 潮)

○夫は一步も歩けませんので老々介護状態です。「生死」たった二音の言葉の重みを日々実感して居ります。
(中田とも子)

○豊宣光様、前号にて拙句を鑑賞下さいまして、ありがとうございます。
(今世紀)

○入っても大國の侵略がある現実、他人事とは思えません。
(成戸 寿彦)

○いつまでも暑い日が続いていつ秋が来るのかと思つてしまいます。
(西前 千恵)

○前号の発送作業を清水工房で行いました。駅からかなり歩くので熱中症を心配しました。
(根岸 操)

○世界政治の異常や物価の異常な高騰も方向性が見えて日本の秋が楽しめることを願っています。
(野口 佐稔)

○小説「国宝」を読み映画「国宝」を観て、少し元気になりました。
(三池 泉)

○櫻さとみ様、一句鑑賞にとりあげていただきありがとうございます。
(鑑賞文に感動いたしました。)

(三池しみず)

○高瀬多佳子様、拙句に批評頂きありがとうございます。
(あけぼの集にはいつも)

○元気をもらっております。
(水落 清子)

○渡部洋一様、前号で会津のご出身と知りなつかしく思いました。
(私は両親ともに)

○喜多方出身、私も喜多方育ちです。今も九十五歳の父が自宅で暮らしているの毎月帰っています。
(満田 光生)

○二月より体調をくずし、陽春句会にて第一位賞を頂きましたが、皆様にご挨拶できず大変失礼いたしました。
(宮腰秀子)

○「季語」の扱いもフクザツな昨今です。
(武藤 幹)

○九月がもう近いのに暑さが続いており何とはなしに体のどこか疲れているような毎日です。
(村井 一枝)

○今年の夏は全国的な猛暑で7月後半に北海道へ帰省旅行した際も行くところ行くところが連日38℃、39℃の道内の最高気温地点に突入していくような状況でした。
(吉川 真美)

○背の低い私は病院の顔認証に苦労しています。見ていた様にそのままを大槻正茂様に拙句を鑑賞していただきました。
(米澤 久子)

○穴原達治様へ。拙句の鑑賞をいただきありがとうございます。
(渡部 洋一)

事務局だより

○当協会のお知らせ等はホームページからもご覧になれます。(通見・亀津幹事担当)
「現代俳句協会」を検索し、「地区活動」から「関東ブロック」の「東京多摩」へと進んでください。

★令和八年度定時総会

日時 令和8年3月20日(金・祝)
場所 立川市子ども未来センター 2F会議室
(JR中央線立川駅南口、徒歩13分)
★陽春句会は従来のやり方を変更し、出席者のみによる持ち寄り句会とします。今回から事前投句はありません。

★会員の現況(9月末現在)

215名(正会員166名・一般会員49名)
☆新入会員 3名(敬称略) *印は正会員
*大石ゆめ(多摩市)
泉月(立川市) 辻 不子(八王子市)

◆多摩地区協会のご入会は、随時受け付けております。現代俳句協会会員で多摩地区に在住の方は、会費は無料(新規入会の方は申し込み手続きが必要)。その他一般の方は年会費2千円です。お問合せ、ご連絡は事務局(下欄枠内)まで

「多摩のあけぼの」編集担当幹事

櫻 さとみ(さ) 青木 隆(隆)
満田 光生(光) 飛永百合子(百)
永井 潮(潮)

◇◇◇◇◇ ご案内 ◇◇◇◇◇

俳句研究会

第11回 11月29日(土)
兼題「時雨」

立川市子ども未来センター
立川駅南口徒歩13分

(とじ込みはがきの地図参照)

第12回 12月20日(土) 午後1時
兼題「冬芽」(冬木の芽)

第1回 1月24日(土) 午後1時
兼題「雑煮」

立川市子ども未来センター

(いずれも会費千円、出句兼題を含む三句)

○初めての方、大いに歓迎します。見学も自由です。

原稿の送り先

「あけぼの集」葉書の送り先と「一句鑑賞」原稿の送り先は共に青木隆さんです。

葉書の切手は85円になりました。貼り間違えないようお願いします。

句や原稿はメールでもお受けします。アドレスは

tamanakebono@googlegroups.com

編集後記

☆夏季休暇中はテレワークが認められており、2週間べったり自宅で過ごしました。定年後のくらしをあれこれ考えてしまう夏でした。(さ)
☆一句鑑賞文の寄稿が残念ながら以前より少なくなっております。構えずに率直な感想を寄稿してください。短文でも結構です。(隆)
☆残暑は「一度涼しさを感じた後に再び返す暑さ」だが、全く涼しくならず九月へ。異常気象が日常に。歳時記と現実の乖離が進む。(光)
☆エノコロ草がかわいいくて道端にあるとつい「一本手折ってきてしまう。コップの中でも相当長持ちする。暑さで弱った心が安らぐ(百)」
☆今号はお知らせする記事も少なく、2ページ減らしました。研究会報告の7、8月分は次号に回させて頂きます。皆さんからの投稿も猛暑で体調を崩された等の事情でやや減少気味です。好季節の到来が待たれます。(潮)

―題字は三橋敏雄氏―

令和七年十月三十一日発行

発行人 水野屋閣
編集人 永井 潮
発行所 東京多摩地区現代俳句協会事務局
〒181-0001
〒181-0015
三鷹市大沢2-10-7

大森敦夫方

TEL 090-9389-4821
E-mail hitemono@ybone.jp

印刷所 株式会社 清水工房
TEL 042-620-2626